

The  
Ikuyo  
Nakamichi  
Road  
to  
2027

The Road to 2027  
IKUYO NAKAMICHI  
Piano Recital

# 仲道郁代

ピアノ・リサイタル

幻想曲の模様

—心のかけらの万華鏡—



令和3年度(第76回)文化庁芸術祭参加公演

## 幻想曲の模様——心のかけらの万華鏡

——この時私を貫いた感情を、誰がいい表せるだろう！  
心の奥深い痛みは和らぎ、愛しい憧憬となって、  
すべての傷に天の香藥を優しく注いだ。  
私はすべてを忘れ、ただ音に耳をひたすら傾けた。  
この世ならぬところからふり降<sub>くだ</sub>って私を包み、  
慰めを支えるこの音に——。

E.T.A.ホフマン『クライスレリアーナ』より（訳・前田昭雄）

憧れ、希求する心は、壊れたかけらのように  
さまざまな様相を持っている。

それらが、幻想という即興的な想いの膨らみとなったとき、  
それぞれの作曲家へふり降り、心の傷を包み込んだ音とは  
どのようなものであったのか。

ただただ、音に耳を傾けてみたいと思う。

仲道郁代

## プロフィール

日本で最も求められ続けているピアニストの一人。音楽から神聖さ、親密さを見出してパーソナルなピアノの音として立ち上らせる独特の演奏スタイルは多くの共感を得ている。近年の活動として最も注目されるのが、2018年に開始された「The Road to 2027 リサイタル・シリーズ」である。ベートーヴェン没後200年と自身の演奏活動40周年が重なる2027年へと向けて行われるこのシリーズは、「春のシリーズ」と「秋のシリーズ」のふたつの流れを持ち、自身の演奏哲学が反映された全20のプログラムから構成されている。当公演は、「秋のシリーズ」第4回にあたる。録音では、レコード・アカデミー賞受賞CDを含む「仲道郁代ベートーヴェン集成」、「モーツァルト：ピアノ・ソナタ全集」など多数リリース。著書に『ピアニストはおもしろい』（春秋社刊）ほか。一般社団法人音楽がヒラク未来代表理事、一般財団法人地域創造理事、桐朋学園大学教授、大阪音楽大学特任教授。  
仲道郁代オフィシャル・ウェブサイト <http://www.ikuyo-nakamichi.com>

ブラームス

## 2つのラプソディ Op. 79 より 第1番

BRAHMS: Rhapsodie in B Minor, Op. 79, No. I

シューマン

## クライスレリアーナ Op. 16

SCHUMANN: Kreisleriana, Op. 16

ショパン

## 幻想曲 Op. 49

CHOPIN: Fantaisie in F Minor, Op. 49

スクリャービン

## 12のエチュード Op. 8 より 第1番、第12番《悲愴》

SCRIABIN: 12 Etudes, Op. 8: No. 1, No. 12

スクリャービン

## 幻想曲 Op. 28

SCRIABIN: Fantasie in B Minor, Op. 28

使用楽器：ベーゼンドルファー モデル280VC

P R O G R A M

## ブラームス：2つのラブソディ Op. 79より 第1番

1863年完成の《パガニーニの主題による変奏曲》の後、ブラームスのピアノ作品の創作は途絶える。1878年に全体が成立した《8つの小品》Op. 76を完成したのち、ブラームスはこの《2つのラブソディ》Op. 79を作曲する。1879年夏に完成したこの作品は、作曲家ヘルツォーゲンベルクの妻ですぐれた作曲家でもあったエリーザベトに捧げられた。その第1番は雄大な楽想の作品で、勢いよく下行する主題が主調のロ短調で示さ

れる。続いて、4度音程と2度音程からなるニ短調のメランコリックな部分に入る。この音程表現はブラームス独特で、《4つの歌》Op. 17の第1曲やチェロ・ソナタ第2番などでも用いられている。主題が再現したのち、ニ短調の動機がロ長調で抒情的に表現される。最後は4度と2度の音程動機が左手のロ音の持続音を背景に奏され、弱音で4度音程を反復して締めくくられる。

## シューマン：クライスレリアーナ Op. 16

《クライスレリアーナ》は、作品の渦巻くようなエネルギーや、初期ロマン派の作家ホフマンの文学作品との結びつきなど、さまざまな点でシューマンの表現を象徴する作品である。この《クライスレリアーナ》の題名はホフマンの『カロ風幻想画集』のなかの短編集『クライスレリアーナ』から取り入れたもので、さらにこの短編集の表題はホフマンの小説『牡猫ムルの人生観』の主人公で、いささか常軌を逸した天才的な楽長ヨハネス・クライスラーに由来している。この作品は、文学と音楽との融合という問題だけではなく、連作作品における主題動機の展開という意味でも、これまでの連作作品にはない要素を含んでいる。

1838年4月14日の午後、シューマンはクララにこのように手紙を書き送った。

「クララよ、この音楽が今、私の中からほとばしる。なんと美しい旋律がいつも浮かび上がる。考えてみてください。この前の手紙から、新しい作品を丸一卷分も書き上げた。私はこれを《クライスレリアーナ》と名づけるつもりだ。この曲のなかではあなた自身とあなたの楽想が主役を演じている。だから私はこれをあなたに捧げようと思っている。もちろん、ほかの誰でもないあなたに。あなたはご自身をここに見出して、微笑むことだろう。」

この作品では特定の動機が繰り返し用いられ、また変ロ長調とト短調の交代を軸として冒頭のニ短調や、第7曲のハ短調が配され、調の統一も図られている。作品は1838年5月に完成し、クララではなくショパンに献呈された。8曲からなり、渦巻くような楽想のニ短調の第1曲の後、「クララの似姿」とされる変ロ長調の第2曲、楽長クライスラーを思わせるト短調の第3曲が続く。第6曲ではバロック時代に盛んに作曲されたシチリアーノの楽想とフランス風序曲の表現が登場し、ハ短調の第7曲ではフガート（自由なフーガ）が用いられ、最後にその後に作曲された《ケルナー歌曲集》Op. 35の第11曲「誰がそんなに前を悩ませるのか」のピアノ伴奏と酷似した部分が続く。最後の第8曲は、第3曲や第5曲の楽想と関連性を持ち、クライスラーが何処かへと去っていくかのように締めくくられる。



©noriyukisoga

## ショパン：幻想曲 Op. 49

ショパンがこの作品を作曲したのは1840年から翌年にかけての時期で、この年に彼は身近な人々との別れをいくつも経験しなければならなかった。親友のマトゥシンスキが病のために彼に見守られてこの世を去り、もう一人の親友のフォンタナがアメリカに去り、かつての恋人で不幸にして別離を余儀なくされたマリア・ヴォジンスキがスカルベックと婚約した。

この作品は「マルツィア・グラヴェ」<sup>1</sup>と記された重々しい前奏に始まる。葬送行進曲のような重い足取りの付点リズムによる旋律であるが、悲

壮感はない。また《幻想曲》という標題ではあるが、作品は極めて構成的で、全体は冒頭の序奏に続いて、主部と中間部と再現部の3部分とコーダからなり、自由なソナタ形式とも見ることができる。作品は前奏の後、アジタートに変わって主部に入る。ヘミオラを用いた右手の主旋律は印象的である。「レント・ソステヌート」<sup>2</sup>からが中間部で、主部とは対照的なロ長調の叙情的な楽想である。そして冒頭の主題が変ロ短調で回帰したのち、作品は変イ長調で輝かしく締めくくられる。

## スクリャービン：12のエチュード Op. 8より 第1番、第12番《悲愴》

この曲集は、ショパンの練習曲集を意識して作曲され、このことはベリャーエフに宛てたスクリャービンの書簡から明らかである。

第1番は嬰ハ長調で3部形式。3連符の刻みがさざ波のような効果をもたらし、颯爽と過ぎていくような表現になっている。中間部は嬰ニ短調で、2小節ごとにフレーズが右手と左手とで交互に移る。

## スクリャービン：幻想曲 Op. 28

《幻想曲》は、1900年から翌年にかけて作曲された。1898年、母校モスクワ音楽院のピアノ科の教授となった彼は、交響曲第1番や第2番、3曲のピアノ・ソナタを次々と完成させ、独自の作風を確立していった。この《幻想曲》は次の新たな創作様式への移行期にあたり、この作品を契機としてスクリャービンは和声語法をさらに一層深めることになる。ヴァーグナーの影響のもとに独自に育んだ半音階的な和声をさらに推し進め、彼の個

性が確立した作品と言える。

作品はソナタ形式で書かれ、3つの主題からなる。第1主題はロ短調の憂鬱な楽想で、続いて提示される第2主題はその繊細な旋律は抒情的である。第3主題はニ長調で快活な楽想である。展開部ではこれらの主題が自由に表現され、続く再現部では第2主題が華やかに再現され、最後は第1主題がロ長調で作品を締めくくる。

# 対談 幻想曲の模様～心のかげらの万華鏡～

The Ikuyo Nakamichi Road to 2027

## 仲道郁代×梅津時比古

聞きて・構成：山野雄大

2027年へ——ベートーヴェンの没後200周年と、仲道郁代の演奏活動40周年とを同時に迎えるその年に向けて展開されているリサイタル・シリーズ「The Road to 2027」。幻想曲をテーマに据えた今年はず、ベートーヴェンを核にした春のシリーズで「幻想曲の系譜 ～心が求めてやまぬもの～」をお届けした。そして本日、ピアノズムの新境地に挑む秋のシリーズは「幻想曲の模様 ～心のかげらの万華鏡～」と題して、ロマン派の影響圏にある作曲家たちが、鍵盤に託したファンタジーのさまざまなをお聴きいただく。本日のプログラムをめぐって、『冬の旅 24の象徴の森へ』[東京書籍]など多くの著書を通して音と言葉の深みにまなざしを向け続けてきた、梅津時比古氏と語り合った。

### ◆幻想化——心の意味づけ

—まず今回のプログラミングをどのようにお考えになったか、そこからお伺いできますか。

仲道：この秋のシリーズは、東京文化会館小ホールという非常にインティメイト（親密）な空間で弾いていくこともあって、より細やかな音のひだや表現の可能性の中から、何を感じることができるのか……ということもシリーズの縦線になっています。それにクロスする横線として、今年は幻想曲というテーマを取り上げています。

5月に開催された春のシリーズでは、幻想曲というものを作曲家たちがいかに捉え、かたちにしてきたか……ということを、「幻想曲の系譜」

と題して辿ることにして、モーツァルト、シューマン、ベートーヴェン、シューベルトの曲たちを弾きました。それに対して今回の秋のシリーズは「幻想曲の模様」として、作曲家たちが幻想曲というものに書き連ねてきたやむにやまれぬ想い、そこには一体なにがあるのか……理屈では説明することができない、心の中の様々なかげらのようなもの、それらが織り成す心模様の世界とは……ということを辿るプログラムになっています。

ブラームスの《ラプソディ》もある種の幻想曲として取り上げることができると思いますし、シューマンの《クライスレリアーナ》にある心模様の世界、ショパンは何を想って《幻想曲》を書いたのか、そしてスクリャーピンの《幻想曲》は……という流れで弾きたいと思いました。

—この選曲をご覧になって、梅津さんはどうお感じになりましたか。

梅津：プログラムを最初に見たときに、なんていうかな……。まず私はいつも「私たちは誰でも〈物語〉を通して世界を認識している」と思っているんです。

たとえば宗教もそう。馬小屋でイエスが生まれた、それを羊飼いたち

が伝えたといった物語によって、世界を認識する。

また、そんな大げさなことでも、たとえば私たちが結婚するとき、将来幸福な生活をできるだろうという物語をつくって、それに沿って結婚する。

その物語というのは、事実とは違う一種の幻想なわけです。そして、そういった「事実を幻想化してゆく」ところに芸術というものがある。

たとえば、川端康成『雪国』の有名な書き出し……「国境の長いトンネルを越えると雪国であった。夜の底が白くなった」という、これも事実を書いているように見えて、幻想ですよ。写真が写真になるためには、幻想が必要なんです。

あるいは、僕が大好きな古泉千樫の短歌で、

鷺の群かずかぎりなき鷺のむれ  
騒然として寂しきものを

という作品がある。これを高校1年で読んだとき「幻想的だなあ」と思ったんですけども、これも幻想化の成り行きがそのまま書かれている。

ということかということ、まず「鷺の群」という事実が提供されて、それが「かずかぎりなき鷺のむれ」と繰り返されることによって、一種

の幻想化が入る。そして「騒然として寂しきものを」と心性化される。心の中に転換されて意味づけされているのです。

こうした幻想化の成り行き——リアルから出発したものが幻想化されて、心の中で意味づけられている……芸術というのはそういうものだと思うんですよ。意味づけされていく、というところがすべてだと思う。

今回演奏されるシューマン《クライスレリアーナ》でいえば、最後の第8曲。ABACAという形式になっていますが、最初に提供されるAの部分から、Bの部分を経て、もう一度Aが繰り返される。この繰り返しによって一種の幻想化がされていますよね。さらにCの部分を経て、また最後にAが繰り返されるときには、私にはとても悲しい感じがする。これはつまり、最初の事実が幻想化されて意味づけされている、ということになります。

今回、仲道さんがこのプログラムで示されたように、「幻想」という視点から曲の分析もできるのではないかと考えましたね。

### ◆シューマンの幻想は「二人称」

仲道：すごく深くて興味深いお話ありがとうございます。

今のお話で心にとまったのが「心の意味づけ」という言葉です。作曲家は、その心の意味づけを、幻想曲に限らずおこなっている。事実と幻想がどのように交錯しているのかはなかなか難しいことですが、音楽家として私が捉える事実やはり、そこにある「音」なんです。どのような音を書いたのか……そして、そこに一体どのような心の意味づけがあ

るのか、ということを探してゆくことになります。

音楽は時間軸の中で体験することなので、受け取り方が変わってくることもあると思います。ただ、受け取り方はやはり聴き手の非常にパーソナルな部分であって、シューマンにとっての変容と、私が弾く時に感じている変容、お聴きになるかたの変容とでは、また違う世界観なのかも知れない。それがとても豊かで面白いところだなと思います。

梅津：そこが特に音楽の魅力ですね。たとえば、悲しい旋律や和声があったとしても、それを弾いてるかたの悲しみと、受け取っているかたの悲しみは、もう本当に千差万別。弾き手が何かの悲しみを込めていても、受けとるかたは、昨日ふられたことで悲しいのかも知れない。ただ、悲しみという構造が共通していて、そこで繋がっていく。それが音楽の素晴らしいところですよ。

そうすると、幻想というものの中にはたぶん、一人称の幻想と二人称の幻想、三人称の幻想があると思うんです。

一人称の幻想というのは、先ほど言ったような、いろいろな想像の中で繰り返されてゆく幻想。二人称の幻想というのは、相手がある。愛する人と一緒に物事を考えたり、話し合っていると、ひとりの時とは全く違う世界に入っていくじゃないですか。そういう幻想がある。三人称の幻想というと、もっと大きな……日本人ならなんとなくお茶の世界を知ってるだろうとか、ドイツ人なら森の影響があるだろうとか、実証されていない一種の幻想。

そして、今はその三人称の幻想の

世界が、極端に変化している。というのは、かつてだったら社会や国家、民族といったことだけで三人称の幻想の世界は作れたと思うんですけれども、新たにネット社会というものができてきた。

ネットというのはまさに幻想ですよ。フェイクニュースが駆け巡って、まるで事実かのように語られてゆき、根拠のない誹謗中傷で自殺者が出たりするという三人称の幻想の社会がある。そういう危険に陥らないためには、一人称の幻想、二人称の幻想が重要です。その点で、シューマンには二人称の幻想が圧倒的に多い。

### ◆時を超えて、繋がれるもの

仲道：今のお話を伺っていてふたつ考えたことがあって。

音楽を演奏する人間から感じる「一人称」が、作曲家だとしますね。その作曲家が感じ、考え、伝えたいものがあって、「二人称」としての演奏家がそれに共鳴したり、感じることを表現したりする。そして、「三人称」としてのお客さまがそれを感じ取る。

私にとってコンサートというの



は、多くのお客さまにお聴きいただいているんですけども、私はお一人お一人に向けて弾いているように思っているんです。三人称であるみなさまも、お一人お一人は、一人称として聴いてくださっている。

ですから、三人称の幻想の危険性も、それが一人称の集まりだと思えば排他的にならなくて済むでしょうし、特にクラシック音楽は、そういったものを大切にできてゆくものなんだな……と感じています。

ふたつめは、たとえばショパンの中に、歴史の激動の中の祖国に対する感覚が厳然とあって、それはいま日本に住む私たちは経験しない種類のことですけども、だからといってショパンの感覚を想像できないということでは、ない。心を寄せれば共感できる、時代や情勢を隔てても繋ぐことができる、というのが、音という純粋なものと感じています。

作曲家の中には、たとえばベートーヴェンのように、はじめ「私」という一人称で考えたものが「我々」になって、それをメッセージにしていくな人もいます。でもシューマンは、梅津さんが仰るように「私」もしくは「私とクララ」の共通の思い、という

ことになる。極めて私的な思い、願い、憧れ、美しい心の世界……。

そして、ここがシューマンの凄いところなんですけれども、その傷ついた心を癒やしてくれるのは、クララでもなく「天」なんですよ。天の世界から降ってくるものが私の傷ついた心を癒やしてくれる、という。

梅津：まさにその通りだと思います。三人称の幻想には、プラス面ももちろんあるわけですね。いま仰ったベートーヴェンも、あれほど対話に満ちた音楽はなくて、つまり「二人称の世界」がたくさんありますよね。第九の最後とかピアノ・ソナタ第31番の最後とか、本当に高らかなところは「三人称の幻想」になるのだろうけれど、それが悪いということではもちろんなくて、ただややもすると歴史的な事実として悪用されてしまったということはある。

それに対してシューマンは、たとえばフロレスタンとオイゼビウスとか、あるいは《クライスレリアーナ》のクライスラー楽長とか、クララへの想いとか二人称の世界が凄く大きいから、良くも悪くも三人称が入り込まないところが魅力だと思います。

仲道：そうですね。幻想性というのは、モーツァルトやベートーヴェンの時代からこのシューマンの時代に入って、表現における暗喩の部分が大きく拡がって、豊かになったと思います。自分の心を、直接的な何かではなく、何かにたとえる。

たとえば、これは前田昭雄先生がご指摘されたことですけども、《クライスレリアーナ》の最後の曲では、(曲のモチーフとなった) E.T.A. ホフマンの作品でクライスラー氏が「僕は中国風マントをかぶって窓から飛び出していくんだ」……と語る一節を引きながら考察しています。これは凄く合致するようなイメージを持つことができます。2曲目の中にも、E.T.A. ホフマンの「花明かりの中を銀の流れが通るように」という一節を思わせる箇所があると。その言葉から触発されるイメージ、それもやはり心模様なんです、それがシューマンの音と重なったとき、それはもう……涙せずにはいられないような美しい世界を見せてくれる。なにか人間の世界を超えた美しさで、でもそこに到達するには、悲しみや痛みを越えてゆかないと見るができなような……そんな美しい世界がそ

こにある、と感じさせてくれるところが、本当に素晴らしいと思います。

### ◆憧れ、心の痛み ——〈幻想〉への力

—今回のプログラムのメッセージには、「憧れ」や「心の傷」といったキーワードがありますね。

仲道：はい、特にシューマンは、本当に心の痛みを知っている人だったのではないかと思います。だから、美しい世界に憧れて、心の痛みを幻想へ転化せずにはいられない。その美しさ、世界観が、私を惹きつけてやまないんです。シューマンは、ショパンに対してなかなか入り込みにくいって言われることもありますよね。梅津さんが仰ったように、いろいろなキャラクターが出てくるのも、自分の中の多面性ということだと思うんです。

でも、そもそも感情って複雑ですからね。わかりやすく聴けたら嘘でしょう、とも思います。シューマンは「あっ、こんなことを想っているの?」「こんな気持ちなの?」と聴いてあげないといけない音楽ですね。与えてくれる音楽ではないし、こちらに向かって演説する音楽ではない。だから、シューマンの音楽に心を寄せて聴いてあげるところに、シューマンの魅力を感じる入口があると思います。

そういう意味で、ショパンのほうは非常にプロフェッショナルです。どんな心の葛藤も、ひとが受け取りやすいようにちゃんと整えて書きますから、本当のところはちょっと隠してるところもある。全てをさらけ出さないんですね、ショパンは。それも美しさだと思います。

でも、今回演奏するショパンの《幻想曲》は、立派な形式で書いていますが、その中にコラルが出てきたり、入り乱れる心が現れているようなところがたくさん出てくる。彼はポーランドを出てからずっと後ろ向きな人で、自分は人生でなぜこちらを選んでしまったんだろう……とか、何も出来ない自分に対する忸怩たる思いがあったと思います。《幻想曲》は、嘆きと祈りという心のうちが溢れ出た作品なのだと思います。

そしてブームスも、やはり痛みを抱えていた人ですね。凄く自己肯定感が低い人だったんじゃないかなって。とても立派な作品を書くのですが、いつも何か下を向いて悲しげですよ。それを立派な形にしなきゃ……という葛藤を感じるんです。

スクリヤービンは、これまでプログラムに乗せて来なかった作曲家ですが、あらためて弾いてみると、シューマンとは違った意味で聖なるものへの憧れが凄かったのではないかと思います。それこそ、私は邪悪なものから超越した世界を知っているというような、ある種ちょっと潔癖というくらいの感覚がハーモニーの移ろいのなかにも感じられて、面白いなあとはまり出してます。

梅津：幻想化の成り行きのなかで、シューマンは文学というか言語を手立てにしている、スクリヤービンは「色」を手立てにしているのだけれども、ショパンは「音」そのもの。手立てや媒介にしているものがないので、よく言われる「音の詩人」とは正にその通りですね。

シューマンとスクリヤービンの聖なるものへの憧れというお話がありましたが、おっしゃる通り性格は違っていると思います。それはシューマンが二人称の幻想に良くも悪くも埋没しているのに対して、スクリヤービンは二人称があんまりないんですよ。一人称からいきなり三人称の世界に飛んじやっている。

ブームスもね、最後のソプラノが悲しいし、シューマンの《クライスレリアーナ》の最後も泣きたいほど悲しい。幻想の極みですね。

仲道：やっぱり作曲家も苦しかったと思います。苦しみ悲しみ、人生生きるとはなんぞやということを、どう昇華していくのか、その様のあり方のさまざまを聴かせてくれる。それが本当に面白いです。



### 梅津時比古 [うめづ・ときひこ]

桐朋学園大学学長、毎日新聞特別編集委員。早大文学部西洋哲学科卒、82～83年、ケルン音楽大学で研修。『<ゼロ弾きのゴージュ>の音楽論』で芸術選奨文部科学大臣賞と岩手日報文学賞賢治賞。NHK「日本の100冊」に『<ゴージュ>という名前』が選ばれる。音楽評論で日本記者クラブ賞。シューベルト研究の著書がドイツで翻訳され刊行されている。



### 山野雄大 [やまの・たけひろ]

ライター。立教大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位取得退学。CD・演奏会の解説、音楽家取材など多数。『レコード芸術』誌ではバレー・ディスク新譜月評を担当。第一生命ホールでの演奏会シリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》で案内役を務めるほか、NHK-FM《オペラ・ファンタスティカ》などラジオ出演も。日本製鉄音楽賞選考委員。



# 仲道郁代 The Road to 2027 リサイタル・シリーズ

## 秋のシリーズ

ピアノという楽器を  
味わい尽くすプログラムが  
並びます。  
より限定された  
“親密な”空間で、  
ピアノの表現の多彩さ、  
細やかさを  
味わっていただく  
シリーズです。

### 2018 第1回

**ショパン**  
～プレイエルの響き～  
ショパン：バラード第1番 Op.23  
ショパン：バラード第2番 Op.38  
ショパン：バラード第3番 Op.47  
ショパン：バラード第4番 Op.52  
ショパン：24の前奏曲 Op.28

### 2019 第2回

**シューマンの夢**  
シューマン：アレグロ Op.8  
シューマン：幻想小曲集 Op.12  
シューマン：予言の鳥 Op.82-7  
シューマン：ピアノ・ソナタ第1番 Op.11

### 2020 第3回

**ドビュッシーの見たもの**  
ドビュッシー：前奏曲集 第1巻  
ドビュッシー：映像 第1集  
ドビュッシー：映像 第2集  
ドビュッシー：喜びの島

『ドビュッシーの見たもの』  
ライブ・レコーディングCD  
好評発売中



### 2021 第4回 本公演

**幻想曲の模様**  
～心のかげらの万華鏡～

ブラームス：2つのラプソディ Op.79より第1番  
シューマン：クライスレリアーナ Op.16  
ショパン：幻想曲 Op.49  
スクリャービン：12のエチュード Op.8より 第1番、第12番  
スクリャービン：幻想曲 Op.28

2019年 秋のシリーズ  
「シューマンの夢」  
東京文化会館小ホール

### 2022 第5回

**前奏曲～永遠への兆し～**  
ドビュッシー：前奏曲集 第2巻  
ラフマニノフ：前奏曲「鐘」Op.3-2  
ラフマニノフ：前奏曲集 Op.23より  
第2番、第5番、第7番  
ラフマニノフ：前奏曲集 Op.32より  
第2番、第5番、第8番、第10番、第11番、第12番

### 2023 第6回

**ブラームスの想念**  
ブラームス：7つの幻想曲 Op.116  
ブラームス：3つの間奏曲 Op.117  
ブラームス：6つの小品 Op.118  
ブラームス：4つの小品 Op.119

### 2024 第7回

**シューベルトの心の花**  
シューベルト：4つの即興曲 D899 Op.90  
シューベルト：4つの即興曲 D935 Op.142

### 2025 第8回

**ラヴェルの狂気**  
ラヴェル：鏡  
ラヴェル：水の戯れ  
ラヴェル：夜のガスパール

### 2026 第9回

**組曲～調和と心慮～**  
グリーグ：組曲「ホルベアの時代より」Op.40  
バッハ：パルティータ第2番 BWV826  
バッハ：イタリヤ協奏曲 BWV971  
バッハ：パルティータ第1番 BWV825  
ラヴェル：クープランの墓

### 2027 第10回

**変奏曲  
～生の命題を編む～**  
モーツァルト：フランスの歌  
「ああ、お母さん聞いて」による12の変奏曲  
(きらきら星変奏曲) K.265  
シューマン：アベック変奏曲 Op.1  
ラフマニノフ：コレリリの主題による変奏曲 Op.42  
ベートーヴェン：創作主題による32の変奏曲  
WoO.80  
ブラームス：ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ Op.24

### 全国で好評展開中

「幻想曲の模様～心のかげらの万華鏡～」は  
当公演に先立ち全国5箇所の会場で  
開催されました。

- 9月18日(土) 14:00  
サントミューゼ 小ホール
- 9月20日(月・祝) 14:00  
アクトシティ浜松 中ホール
- 9月23日(木・祝) 14:00  
長岡リリックホール コンサートホール
- 9月29日(水) 14:00  
高崎芸術劇場
- 10月17日(日) 14:00  
奈井江町文化ホール

### 秋のシリーズ

「**実**体のあるものも、ないものも音に変換されてそこに  
あるかのように立ち昇る……」、と仲道郁代さんは  
ドビュッシーの本質を語っています。その演奏は、言葉通り  
に、作曲家が音に込めた微細な気配までも見事に映し出し  
ていました。音楽へのこの深い感応力が、ショパンやシュー  
マンの魂の哀しみに、シューベルトやブラームスの真摯な  
ひたむきさに、スクリャービンの色彩にみちた神秘に、ラフ  
マニノフの抒情の劇性に、ラヴェルの粋な佇まいの裏に隠  
された真実に……光を当ててくれることでしょう。

松橋麻利 (音楽学者・ドビュッシー研究家)

2020年 秋のシリーズ  
「ドビュッシーの見たもの」  
東京文化会館小ホール

## 春のシリーズ

音楽を哲学的に探求するシリーズです。  
ベートーヴェンのピアノ・ソナタを核に据え、  
ベートーヴェン以前・以後の作品とともに  
各回のテーマに迫ります。

### 2018 第1回

**パッションと理性**  
モーツァルト：ピアノ・ソナタ K.310  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ  
第17番「テンペスト」Op.31-2  
ショパン：バラード第1番 Op.23  
リスト：ダンテを読んで S.161-7  
第3番 Op.5

### 2019 第2回

**悲哀の力**  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ  
第8番「悲愴」Op.13  
ブラームス：8つのピアノ小品 Op.76  
シューベルト：ピアノ・ソナタ  
第19番 D958

### 2020 第3回

**音楽における十字架**  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第22番  
Op.54  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第21番  
「ワルトシュタイン」Op.53  
ショパン：2つのノクターン Op.48  
シューマン：ピアノ・ソナタ第3番 Op.14  
※2028年に延期

### 2021 第4回

**幻想曲の系譜  
～心が求めてやまぬもの～**  
モーツァルト：幻想曲 K.475  
シューマン：幻想曲 Op.17  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第28番 Op.101  
シューベルト：さすらい人幻想曲 D760 Op.15

2021年 春のシリーズ  
「幻想曲の系譜～心が求めてやまぬもの～」  
サントリーホール



### 2022 第5回

**知の泉**  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ  
第17番「テンペスト」Op.31-2  
ショパン：バラード第1番 Op.23  
リスト：ダンテを読んで S.161-7  
ムソルグスキー：組曲「展覧会の絵」

### 2023 第6回

**劇場の世界**  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第19番 Op.49-1  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第20番 Op.49-2  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第18番 Op.31-3  
シューマン：パピヨン Op.2  
シューマン：謝肉祭 Op.9

### 2024 第7回

**夢は何処へ**  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第27番 Op.90  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第13番 Op.27-1  
ベートーヴェン：  
ピアノ・ソナタ第14番「月光」Op.27-2  
シューベルト：  
ピアノ・ソナタ第18番「幻想」D894 Op.78

### 2025 第8回

**高雅な踊り**  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第24番「テレーゼ」Op.78  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第25番 Op.79  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第26番「告别」Op.81a  
リスト：メフィスト・ワルツ  
第1番「村の居酒屋での踊り」S.514  
ラヴェル：優雅で感傷的なワルツ  
ショパン：ワルツ「告别」Op.69-1  
ショパン：ワルツ Op.64-2  
ショパン：ポロネーズ第6番「英雄」Op.53

### 2026 第9回

**音楽の哲学**  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第30番 Op.109  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番 Op.110  
シェーンベルク：6つの小さなピアノ曲 Op.19  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第32番 Op.111

### 2027 第10回

**生と死の揺らぎ**  
ショパン：ピアノ・ソナタ第2番「葬送」Op.35  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番  
「ハンマー・クラヴィア」Op.106

### 仲道郁代オフィシャルYouTubeチャンネル

オフィシャルYouTubeチャンネルでは仲道郁代のコンサ  
ートのダイジェスト映像を公開しています。インタビューや対  
談などとともに、仲道郁代の世界をより深く味わっていただ  
けるものとなっています。ぜひお楽しみください。

The Road to 2027リサイタル・シリーズでは、2020年秋「ドビュッシーの  
見たもの」のダイジェスト映像や、「幻想曲の模様」の関連映像として、当プ  
ログラムにも掲載された梅津時比古氏との対談の映像も公開中。本公演の映  
像も後日公開予定です。





Vienna Concert

Model 280VC

**Bösendorfer**

¥25,630,000 (税込)  
Length 280cm / Width 157cm / Height 102cm / Weight 507kg / 88 Keys  
株式会社ヤマハミュージックジャパン ベーゼンドルファー・ジャパン

[本公演使用ピアノ]

# 仲道郁代のCD名盤・絶賛発売中

ドビュッシーが心に投影した理想の響きがここに。

## ドビュッシーの見たもの 前奏曲集I・映像I/II・喜びの島

仲道郁代(ピアノ/ヤマハコンサートグランドCFX)

2020年10月25日、東京文化会館小ホールでの「Ikuyo Nakamichi Road to 2027  
仲道郁代ピアノ・リサイタル ドビュッシーの見たもの」におけるライブ・レコーディング

ハイブリッドディスク ©SICC-19053  
定価 ¥3,300



令和3年度文化庁芸術祭参加作品



### シューマンの名盤



シューマン：ファンタジー  
ハイブリッドディスク ©SICC 19008  
定価 ¥3,300



シューマン：  
子供の情景&クライスレリアーナ  
CD ©BVCC 1090 定価 ¥2,136

公演曲収録

### ショパンの名盤



ショパン：ワルツ  
CD ©SICC 40084  
定価 ¥1,760

### ベートーヴェンの名盤



仲道郁代ベートーヴェン集成  
～ピアノ・ソナタ&協奏曲全集  
12CD+3ハイブリッドディスク+2DVD  
©SICC 39032-48 定価 ¥19,800  
完全生産限定盤



ソニーミュージック | CLASSIC  
@sonyclassicaljp

Sony Music Labels Inc.



# 未来につなぐ、おいしい笑顔。

素晴らしい音楽は、心を躍らせ、人を笑顔にします。

私たちハウス食品グループは、  
音楽が人に感動を与えるように、食を通じて、  
幸せを届けたい。

おいしさと健康で、  
笑顔ある暮らしを共につくりたい。  
これからも、人と笑顔をつなぐ、  
皆さまのグッドパートナーを目指して。

Plate:RAYNAUD

エルキュイ・レイノー 青山店 Tel.03-3797-0911

食でつなぐ、人と笑顔を。

 *House* ハウス食品グループ

## The Road to 2027

仲道郁代ピアノ・リサイタル 「幻想曲の模様一心のかけらの万華鏡」  
2021年10月23日(土) 開演 14:00 東京文化会館 小ホール

主催：ジャパン・アーツ

協賛： *House* ハウス食品グループ

協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル／パーゼンドルファー・ジャパン

発行：有限会社オフィス・ナカミチ

デザイン：三木和彦／株式会社アンバサンドワークス

編集：北川由子／有限会社オフィス・ナカミチ

表紙写真：noriyukisoga

制作：ジャパン・アーツ